

|           |   |
|-----------|---|
| 氏名 (生年月日) | <small>タカ ヤナギ コウ ヘイ</small><br>高 柳 浩 平 (1991 年 12 月 22 日) |
| 学位の種類     | 博士 (文学)   |
| 学位記番号     | 文博甲第 159 号  |
| 学位授与の日付   | 2023 年 3 月 16 日   |
| 学位授与の要件   | 中央大学学位規則第 4 条第 1 項  |
| 学位論文題目    | 中古漢語の使役構文に関する記述的研究<br>——魏晉南北朝期の 5 種の直接使役構文——              |
| 論文審査委員    | 主査 石村 広<br>副査 材木谷 敦・松江 崇                                  |

### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

#### 1. 本論文の目的と構成

本論文の目的は、中古早期（魏晉南北朝期）の漢語に用いられた 5 種類の直接使役構文の共時的・通時的な関係を明らかにすることにある。各種構文の共時的状況を体系的に記述した上で、生起条件の違いと歴史的な派生・影響関係とを検討し、複合型・分離型という類型学的観点から、当該構文をより大きな視点でとらえ直している。考察対象は、(1) 使動用法 (V+O)、(2) 使成式 (V1+V2/A+O)、(3) “使” 構文 (使/令+O+V/A)、(4) 新兼語式 (V1+O+V2/A)、(5) 有標型新兼語式 (V1+O+使/令+V2/A) の 5 つである (V は動詞、A は形容詞、O は目的語を表す。以下同じ)。大きく分けると、(1) (2) は「複合型 (語彙型)」、(3) ~ (5) は二つの述語の間に目的語が割り込む「分離型」の直接使役構文である。

本論文は、次のような構成となっている。

#### 序章

0. 本研究の目的と対象
1. 時代背景とその研究意義
2. 時代区分について
3. “使役” 研究の概観と定義付け
4. 本研究の構成
5. 本研究で用いる文献資料

#### 第 1 章 “使” 構文の形式と意味

0. はじめに
1. 上古期の「使」
2. 「使」文法化の統語的要因

3. 魏晋南北朝期の“使”構文
4. 類像性(iconicity)と“使”構文
5. 本章のまとめ

## 第2章 新兼語式の形式と意味

0. はじめに
1. 隔開式動補構造説
2. 新兼語式説
3. 隔開式説の問題点
4. 新兼語式の形成ルート
5. 『百喻経』の統計的調査
6. 本章のまとめ

## 第3章 有標型新兼語式の形式と意味

0. はじめに
1. 有標型新兼語式の形成過程
2. 中古早期の有標型新兼語式
3. 有標型新兼語式と動補構造説
4. 有標型新兼語式の発展
5. 本章のまとめ

## 第4章 使動用法と使成式の交替関係

0. はじめに
1. 上古期の使動用法と使役連動文
2. 中古早期の使動用法と使成式
3. 中古早期における文献調査
4. 本章のまとめ

## 第5章 言語類型論から見る5種の直接使役構文

0. はじめに
1. 言語類型論における使役構文の形式と意味
2. 中古早期の直接使役構文の類型
3. 結果述語の性質から見る直接使役構文
4. 本章のまとめ

## 終章 本研究の結論と課題

## 2. 各章ごとの内容

序章では、本研究の目的と対象、時代背景と研究意義、時代区分、使役の定義や使役研究の概観など調査・分析の前提となる事柄について記述している。文献資料に関しては、口語性の強い文献

資料、とりわけ中古早期に書かれた漢訳仏典を使用することの学術的意義について述べている。また、計量分析の重要性についても触れている。

第1章では、上古期から中古早期にかけて大きな意味の変化を遂げた“使”構文を取り上げている。上古漢語における動詞“使”の原型的意味は派遣義であり、そこから命令義を経て抽象的な使動義（～させる）へと意味変化を遂げるプロセスを、①第2動詞の意図性と動作性の減少、②使役主の意図性の減少と無情物化、③被使役主の意図性の減少と無情物化の3点から検証している。成書時期の異なる『世説新語』と『百喻経』を網羅的に調査し、“使”に生じた「意味の漂白」(semantic bleaching)の経緯について自身の作成した統計データを基に客観的に記述している。

第2章では、上古後期から中古早期にかけて発達した新兼語式(V1+0+V2/A)を取り上げている。上古期(漢代)の連動文(2つの他動詞機能をもつ動詞の並列構造)における第2動詞(使動用法)が自動詞化したことにより、今日広く使用される複合型の使成式(V1+V2+0:V2は自動詞/形容詞)が成立した。連動文から分離型の新兼語式(V1+0+V2/A)が派生したとする説も存するが、本論文は、両者の間に時代的な先後の関係は認められないとし、この説を否定している。そして、新兼語式は、原因と結果の関係からなる複文(V1+0, 0+V2/A:2つ目的語は同一指示)が縮約して生じたことを説いている(複文縮約化説)。また、もう一つの形成ルートとして、“使”構文における使役マーカ―の“使”が一般動詞に置き換わって新兼語式が成立した可能性についても言及している(語彙置換説)。最後に、第2動詞の前に副詞が置かれる文例を挙げて、古代漢語の文法体系に現代語の「補語」の概念を持ち込むことに対して疑問を呈している。

第3章では、分離型の有標型新兼語式(V1+0+使/令+V2/A)を取り上げている。ここでは、上古期から中古早期までの10部の文献を精査し、当該形式は、因果関係からなる複文が使動義を表す“使/令”を紐帯として縮約化したことを論じている。これが中古期に定型化した証拠として、当該構文の結果を表す第2動詞が形成期には状態性の強い“熟”類(使動用法に乏しい自動詞・形容詞)に属する語だったが、中古期に入ると“破”類(自動・使動両用の動詞)に属する語も用いられるようになったことを挙げている。当該構文は従来、農書や医書といった説明的な文章に用いられる特殊形式と見られてきた。だが、仔細に観察すると、漢訳仏典の説話の中にも多数文例を確認することができる。当該構文は宋代以降、急速に衰退するが、中古早期には口語でも使用されていた可能性が高い。

第4章では、上古期から中古早期にかけて最も広く用いられていた使動用法と使成式との関係性について論じている。両者は継承関係にある。上述の如く、通時的に見ると、使動用法が連動文(並列構造)を介して使成式に取って代わり、現在ではこれが広く普及している。先行研究では、使成式の成立年代を魏晉南北朝期とする説が根強い。これに対して本論文では、中古早期に書かれた6部の文献を使って両構文の使用状況を精査し、①連動文の第2動詞に用いられている使動用法は従来考えられてきたほど自動詞化していないこと、②単体の使動用法も頻出することの2点を指摘し、魏晉南北朝期は使成式がまだ十分な発達を遂げていないと結論付けている。

第5章では、「意味(使役性の強弱)と形式の対応関係」という理論的側面から、前の各章で論じ

てきた5つの直接使役構文の関係性ならびに一般性と特殊性について議論している。「直接使役」とは使役者の動作行為が対象物に直接作用して何らかの状態変化を引き起こす事象を指す。人間の言語は、この種の使役性の高い場面状況を語彙（使役性他動詞）で表現する傾向が強い。ところが本研究が行なった文献調査によると、中古早期は使動用法や連動文（のちの使成式）だけでなく、分離型の直接使役構文、すなわち新兼語式と有標型新兼語式も広く使用されていたことが判明している。このことは、人間言語の一般的傾向に反するように思える。この点に対する答えとして、本論文は、複合型の第2動詞には“破”類に属する語が、分離型の第2動詞には状態性の強い“熟”類に属する語が用いられていたとの見解を提示している。言い換えると、分離型は、当時の漢語の述語体系からみて“熟”類に属する典型的な動詞および形容詞を結果述語に用いる際の必須形式であり、中古早期における生産的な構文だったと主張している。

終章では、全体を総括して二つの結論が述べられている。第一に、中古早期には5種の直接使役構文が併用されていたが、第2動詞（結果述語）の意味特徴に着目すると、複合型の直接使役構文には“破”類に属する語が用いられ、分離型の直接使役構文には“熟”類に属する語が用いられるという体系的な使い分けがなされていた。第二に、現代漢語で広く使用される使成式は、中古早期の段階ではなお未発達段階にあり、連動文および単体の使動用法の方が優勢だった。使成式の成立時期を魏晉南北朝期とする学説は、再度検討する余地がある。

### 3. 本論文の評価

#### (1) テーマ設定に関して

漢語史の時代区分でいう中古期は、後漢の「音韻体系の簡素化」と「語彙の複音節化」に始まり、漢語の文法構造に大きな変化が生じた時期である。現代漢語における主要な構文は、この中古期に祖型が形成されている。従来の研究では、上古期（先秦～兩漢）と近世期（宋代～）の研究は盛んだが、中古期の漢語文法研究は未だ手薄な状況にある。中でも直接使役のような「原型的使役」を扱うことは重要な意義がある。本論文のテーマ設定は適切であると言える。

#### (2) 研究方法の適切性に関して

本論文は、文献資料の調査に基づき客観的に言語現象を記述する手法を用いている。資料の選別が重要なことは言うまでもない。本研究では、①口語性が強いこと、②成書時期が比較的定まっていることの2点を文献資料の選定基準としている。漢訳仏典の訳者についても十分吟味している。もう一つ指摘しておきたいのは、記述研究でありながら、「文法化」理論や使役の複合事象分析など理論的観点をも十全に活用していることである。言語事実に関する観察と理論的分析とがバランスよくなされており、研究方法は適切である。

#### (3) 論文構成と論理性に関して

各章は、当該構文の通時的な流れを踏まえて配置されている。5つの異なる文型を扱っているが、各章は有機的に繋がっており、議論の展開にも一貫性と論理性がある。文献資料の調査結果に基づき、自身の提示した仮説を客観的に論証している。

(4) 論文の形式に関して

中国語学の研究論文として適切な形式が用いられている。注釈や参考文献の書き方も慣例に従っており、適切である。

(5) 独自性と意義に関して

構文変化の流れを踏まえつつ、中古早期という共時的側面から、漢語の直接使役構文の実相を体系的に浮き彫りにしようとしている。後漢から中古期に大量に現れた漢訳仏典の口語性に着目し、従来の研究よりも調査範囲を広げて各種構文の使用状況を調査・分析している。定説に対しても独自の視点から再検討を促しており、独自性と学術的意義を十分具えていると判断できる。

(6) 不正行為に関して

他者の見解については先行研究から適切に引用している。資料に対する捏造、改ざん等の不正な取り扱いも認められない。

#### 4. 全体的な評価

全体的な評価として特筆すべき点を二つ挙げる。

まず、中古早期という共時的側面から諸構文の構造上の差異を体系的に捉えようとした点である。今日用いられる複合型に関しては先行研究が多いものの、近世期以降衰退・消滅した分離型の新兼語式と有標型新兼語式については「過渡期の用法」や「周辺の特殊形式」などとされ、それらの使用状況や構文相互の関連性については考察が不十分だった。本論文では、複合型と分離型との間に体系的な「棲み分け」、すなわち、複合型に該当する中古早期の連動文（後代の使成式）の結果述語は自他両用動詞（“破”類）だが、分離型の結果述語は状態性の強い動詞（“熟”類）であることを慎重かつ丁寧に記述している。この共時的な分布状況は、「分離型は因果関係からなる複文の縮約化によって生じた」という構文形成の通時的プロセスともかみ合う。本論文の主張は、従来の「兼語式に複合化が生じて使成式が成立した」とする説や「使動用法の衰退が使役マーカの発達を促し、有標型新兼語式が生じた」とする説に再検討を促すものであり、これまで活発に議論されてきた当該諸構文の形成ルートの問題に有力な見方を提示するものである。また、使成式の成立時期に関する学説に対しても、独自の地道な調査から、魏晋南北朝期ではなく隋代以降であるとの結論に到達しており、この点も十分評価できる。

次に挙げられるのは、漢訳仏典を活用して、先行研究よりも調査範囲を広げた点である。漢訳仏典の中の物語や説話は漢語の口語史研究に格好の材料を提供してくれるが、この種の調査は膨大な作業を要するため、実行性に困難があった。高柳氏はそれを真摯な努力により克服している。本論文では、漢代に訳出されたものを含むほぼ全ての漢訳仏典の用例を『大正新脩大蔵経』（多数の大蔵経等を校本として編纂され、1924年から1934年にかけて大蔵出版より刊行された。全100巻）という大部の叢書から採集している。今後さらに調査範囲を広げる必要はあるが、本書を利用したことにより、中古早期の分離型が特定の書面語的な文体に限らず、口語でも使用されていた可能性が高いことが確かめられた。また、使動用法が中古早期においてもなお優勢であったとする見解も、

漢訳仏典を用いた統計調査とその分析結果に裏付けられており説得力がある。

他方、検討すべき点もみられる。本論文では、使成式の成立時期を隋代以降と推論している。この見極めには「使動用法の減少」を判断基準にすべきであると説くが、個々の動詞・形容詞によって使動用法の衰退時期は異なる。加えて、語形変化を用いない漢語において、連動文における第2動詞の自動詞化を数量的に測るのは困難である。量的変化とあわせて“V殺0”に代わり“V死0”が用いられるなど質的变化にも注意を向けるべきだろう。

また、漢訳仏典にみられる状況と一般の中国本土文献との言語的差異については、原則として口語性による違いと解釈している。この点についても、翻訳文献としての性質を踏まえた、より一層慎重な検討が求められる。例えば、中古期は四字句が仏典散文の主流となった時期だが、この四字句の連続という現象(ポーズが置かれる位置)が文型や語法に影響している可能性は排除できない。翻訳漢文である以上、有標型新兼語式などはどれだけ自然な表現だったと言えるのかはなお不透明な部分がある。とは言え、漢訳仏典の物語や説話部分に口語的性格が顕著なのは確かであり、このような指摘は本論文の結論に影響するものではない。むしろ歴史文法分野における研究の不備とその重要性に着目した点こそ評価されるべきだろう。漢訳仏典を利用した研究の裾野は広い。仏典漢訳という視点から見れば、漢字文化圏の翻訳史という領域も視野に入ってくる。今後の研究の進展を期待したい。

## 5. 最終評価

考察対象が多岐にわたりながら、文献資料を入念に調べている。記述的な成果を理論的にとらえ直すことにより、中国語学の領域のみにとどまらず、歴史言語学一般にも貢献し得る内容となっている。とりわけ「分離型」直接使役構文が果たした歴史上の役割を指摘した学術的意義は大きい。検討すべき点も見られるが、未解決であった研究課題に対して、本論文は十分首肯できる結論を導き出しており、その内容は高く評価することができる。

以上により、審査委員一同は、本論文が博士学位を授与するにふさわしい水準に達していると認め、合格と判定する。